

岡田晃

秀吉・家康も恐れた!?
（島津四兄弟の最強伝説）

薩摩と言へば、長州とともに明治維新を成し遂げた主役だが、中央から遠く離れた九州最南端の藩がどのようにして幕府を倒す力を蓄えたのだろうか。その強さは、元をたどれば戦国末期の島津四兄弟（義久、義弘、歳久、家久）が作り上げたものだつた。

義弘は千人（諸説あり）の手勢を率いて西軍に参陣したものの、西軍は敗退、島津軍は戦場に残され孤立してしまった。すでに退路は断たれ、義弘は正面突破して脱出するしかないと決断した。

ここから、敵に向かつて前進するという前代未聞の撤退が始まる。家臣たちが義弘を守りながら、正面の福島正則隊にまず突撃、続いて井伊直政隊、本多忠勝隊ら精鋭の追撃を振り切り、大胆

だがその戦法は、捨て奸サテカという壮絶なものだった。義弘を守る本隊が退却するのに合わせ、殿タテマをつとめる少人数の兵士がその場にとどまって追っ手の兵と戦う。もちろん彼らに勝ち目はない。義弘を無事に逃がすために時間を稼ぎ命を捨てるのだ。最初の殿部隊が全滅すると次の殿部隊が戦い、また全滅する。これを繰り返すのである。

義弘主従はやつとの思いで大坂までたどり着き、船で薩摩に帰還を果たしたが、薩摩に戻った時には八十人余りしか残っていなかったという。

この撤退戦は「島津の退き口」と呼ばれ、後世の語り草となるのだが、家康には「島津恐るべし」という強烈な印象を植え付けたのだった。

家康に半月後、島津討伐のため九州の諸大名を薩摩に向かわせたが、攻撃開始を命令できなかつた。島津の本隊は関ヶ原に参陣しておらず地元・薩摩で健在で、戦鬪が長引けば徳川に反旗を翻す

結局 当主の義久が徳川方と粘り腰の交渉を続け、二年後に「本領安堵」を認めさせた。処罰無し、領土も削られずに決着させたのだから、義久の交渉力は拔群だったと言つてよいだろう。その背景には、島津軍の並外れた強さと固い結束があつたことは間違いない。平たく言えば、「島津にうかつに手は出せない」と家康に思わせたわけだ。

重要な戦いで次々に勝利
 ↳「オンリーワンの強さ」を発揮

島津軍の強さは、以前から鳴り響いていた。その軌跡を振り返ってみよう。

義久が島津氏の第十六代当主となつたのは一五六六年。島津氏は鎌倉時代以来の名門だが、その頃は内部抗争が続いていた。だが義久は四年後にまず薩摩を統一。その二年後、日向の伊東氏と対決し、十分の一の兵力で勝利した。義弘が指揮したこの戦いは「九州の桶狭間」と呼ばれ、島津は

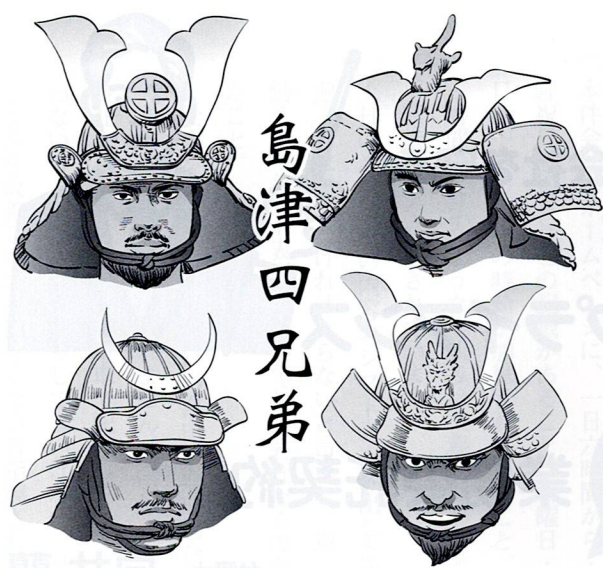
日向進出の足掛かりを得る。

武勇は義弘だけではなかった。豊後の大友氏との決戦（耳川の戦い、一五七八年）では義久自らが指揮を執り、巧みな戦術で大勝した。これを機に大友氏は衰退に向かう。

大友氏と入れ替わるように肥前の龍造寺氏が勢力を拡大、一五八四年に両軍は島原半島で激突する。ここで活躍したのが四男・家久で、数倍以上の敵兵を狭い湿地帯に誘い込み圧勝した。

このように重要な戦いでは必ず勝つという強さ、そして十年余りで九州随一の大名に躍進したスピード、まさに「オンリーワンの強さ」だった。

勢いづいた島津は義久の総指揮の下で筑前・筑後まで攻め上り、大友氏麾下の高橋紹運・立花宗茂父子と対決（本稿第四十二回参照）。続いて、大友氏の本拠地・豊後に攻め入り、同氏を滅亡寸



前まで追い詰めた。あと一歩で九州全土統一というところまで勝ち進んだのだった。

大友氏の当主・宗麟は豊臣秀吉に救援を求め、秀吉は九州平定へ先発隊二万をまず派遣、島津軍が迎え撃った（一五八七年、戸次川の戦い）。ここでも島津軍は兵力では劣勢だったが、家久の指揮の下で大勝利を収めた。豊臣方は、四国の雄・長宗我部元親の嫡男・信親をはじめ、大名クラスの有力武将を数多く失った。

九州統一の寸前で秀吉に降伏 兄弟で役割分担しつつ結束持続

だが秀吉が総勢十万とも二十万とも言われる大軍を率いて九州に攻め入った。さすがの島津も降伏せざるを得なかった。

秀吉は義久を赦免したものの、島津が攻め取ってきた九州のほぼ全土を取り上げ、義久に認めたのは薩摩一国のみだった。島津にしてみれば、元の木阿弥である。そのうえで義弘に大隅一国を与え、義久と並ぶ大名として遇したのだ。

また、家久は日向の佐土原（現・宮崎市）を領地としていたが、秀吉は日向を取り上げたうえで、佐土原を家久に返した。これらの措置は島津に配慮を見せつつ、兄弟を分断する狙いだった。

ただその直後、家久は急死した。真相は不明だ。四兄弟のうち一人、三男の歳久についてだが、秀吉への降伏には最後まで抵抗した。家臣に命じて秀吉の駕籠に矢を射かけさせたこともあるほどだ。降伏した後も秀吉に反抗的な態度をとり続けたため、秀吉は歳久を自害させるよう義久に命じた。

たのだった（一五九二年）。

その後、秀吉は大隅の義弘を薩摩へ、薩摩の義久を大隅へと入れ替えた。事実上、義弘を当主にしたようなものだ。この時、四兄弟は二人になっていたが、あの手この手で島津の弱体化を図ろうとしたのだった。それだけ兄弟の力を恐れたからだろう。

こうした経緯もあって、義久は秀吉と距離を置き、義弘は親秀吉的な姿勢だった。だが二人が対立したわけではない。義弘は秀吉から当主の扱いを受けても鹿児島には入らず、兄・義久を立てる態度をとり続けたという。いわば兄弟が役割分担をしつつ、協力して「強い島津」を守ったのだ。このような気風が江戸時代を通じて受け継がれ、明治維新の原動力にもなったと言える。

現代でも、兄弟が協力して成長した企業は多い。四兄弟という点では、カシオ計算機を創業した樫尾四兄弟が思い浮かぶ。樫尾四兄弟はそれぞれ得意の技術やアイデア、営業などで役割分担しながら力を合わせて電卓、時計などを開発、「オンリーワンの強さ」を誇るカシオを作ったのだ。

これは兄弟に限らない。どの企業でも「オンリーワンの強さ」とそれを支える「結束力」「役割分担」が重要なのである。

岡田晃（おかだ あきら）

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授、同特別招聘教授を経て、二〇二五年に同特命教授。